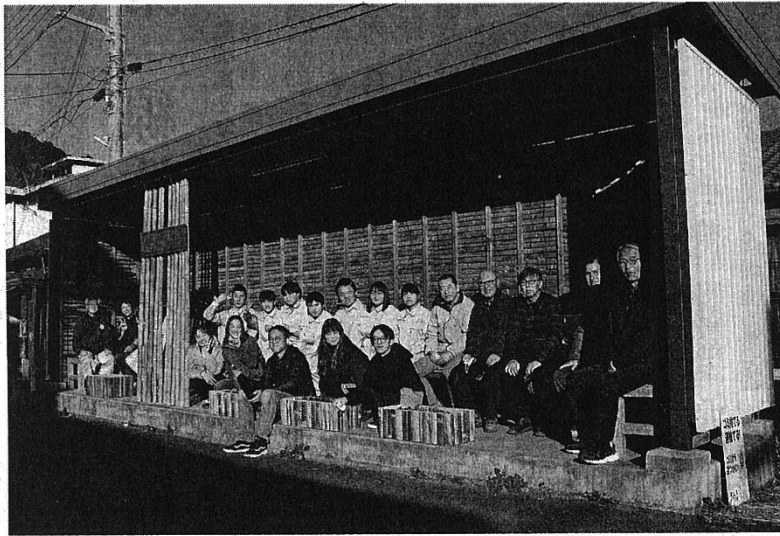


待合所の内装美しく

「福住」バス停 関大生と東雲高改修

関西大学住環境デザイン研究室の学生約10人と、篠山東雲高校アグリサービスタップスの2年生7人が、竹で改装した「福住」バス停の待合所（高さ3.5m、幅9m、奥行2.5m程度）の改修に取り組んだ。福住地区内の放置竹林から切り出した竹を活用。内壁の側面と、老朽化が著しかった木製ベンチを改修し、内装を美しく生まれ変わらせた。学生と東雲高生が共に竹のプランターも製作し、花を植えて設置した。

同地区内の住居で多く、案。改修前の内壁は、両造物群保存地区の町並みで見られる構造を調査し、側面が白いトタンで出来ており、国重要伝統的建造物群保存地区の町並みになじみがない印象が町並みになじむ外観を考へており、竹を張ったため、竹を張った。



地域で伐採の竹活用

ベンチは、色あせた6基をリメイク。2基を側面の大きさに合わせて新たに製作した。雨風や日光に当たらないよう、計8基をコの字に配置した。竹のプランターは、高さ待合所の土台に合わせて作り、待合所前に設置。色合いが華やかな同校生が栽培したパンジーやビオラなどを植えている。

来年は、白いトタンの外壁と、日焼けした背もたれの改修に取り組み。調査結果を踏まえ、外壁には、漆喰を塗って焼き杉板を張り、腰壁に仕上げ。背もたれは、柿渋染めを施し、赤茶色にする予定。

同バス停は2017年

に、京都大学地球環境学部の学生と東雲高生が中心となって改修。当時、学生代表を務めていたさん(32)が関西大に助教として着任したことを機に、同大の学生が改修を引き継いだ。改修は1月から始動。竹材を切り出し、同地区のNPO法人・SHUKUBAのメンバーや、バス停を管理する市と、改修の進め方やデザインなどについて打ち合わせを重ねた。福住から西野々までの街道沿いの住居の構造を調べるため、1軒ずつ歩いて回った。10月に施工が始まってからはほぼ毎週、福住に足を運んだ。

東雲高生は8月に合流。同類型の生徒の専門分野を生かし、プランターの設置を考案。竹の伐採や加工、プランターやベンチの製作などを行った。

同研究室代表で、同大大学院1年のさん(23)は「地域の方が、福住の町並みを好きになるきっかけになってほしい」と笑顔。同校の君(篠山中出身)は「竹の色味が福住のまちになじんでいる」

と話した。福住地区まちづくり協議会の会長(73)＝小野奥谷＝は「今までは側面が寂しかった。自然な温かみを感じるようになった。来年に開かれる重伝建地区の全国大会の盛り上げにも一役買うのでは」と期待している。

2022年12月29日

丹波新聞